



### ●ご紹介する内容

三十八年前の五月二十六日、日本海中部地震によって、北海道南西部から秋田県沿岸に甚大な被害をもたらしました。深浦町及び岩崎村（当時）併せて、死者三名、建物や公共施設、農林水産関係など当時の被害額は八十億円以上だったと記録にあります。もちろん、記憶にも鮮明に残っている方も大勢おられることでしょう。そこで今回は、地震・津波に焦点を当てていきたいと思います。



火を放ったことによって、命が救われたことに気付くのです。

### ●「稲むらの火」の実際と濱口の偉業

前記の物語は、史実には基づいていますが、作者によってフィクション化されています。史実では晩秋の午後四時頃に地震が発生し、暗くなったことで、村人は津波に気付いても避難に戸惑っており、濱口が津波（おそらく第一波）に自ら流されそうになりながらも、村人に避難を呼びかけています。稲むらに火を放ったことも、逃げ遅れた人が居ないか探しだすためだったようです。

濱口は、村人を自らの命を賭して守っただけでも偉業と言えますが、現代においては**例え消防団員や地区の役員、公務員であつても、津波が迫っている中では自己の避難を優先することが求められる**ています。濱口の本当の偉業は、この津波以降、常人ではなかなかできない活動をしていることです。

では、その活動を紹介します。まず、地震から一日の内に、避難民の食料を調達し、その翌日に今でいう仮設住宅の建設を準備をして村人の避難生活を支えました。しかしその後、田畑を塩害で失

●津波防災の先駆けとなった偉人  
昨年二〇二〇年は**濱口梧陵（はまぐちこうりょう）**の生誕二百年目の年でした。

昭和初期から二十二年まで小学校の教科書にも紹介されていた偉人です。東日本大震災の後、国が十一月五日を「津波の日」と定め、その後、日本の働きかけによって、国連の「世界津波の日」に制定されたことや、濱口の先駆的な津波防災活動を称えるために「**濱口梧陵国際賞（国土交通大臣賞）**」が創設され、世界の中から津波防災功労者・団体が表彰されるようになり、広く知られるようになりました。

ではなぜ二百年前の偉人が今の津波防災活動に影響を与えているのか？それは、千八百五十四年に和歌山県（当時紀州）を襲った安政南海地震の大津波から大勢の村人を救った「**稲むらの火**」の物語を知れば理解できます。銅像の右手、一見オリンピックの聖火の様にも見えますが、持っているのはまさしく松明（たいまつ）で、何か叫んでいるようにも見えます。

### ●「稲むらの火」の物語

濱口は三十五歳の年の十一月五日、江戸や紀州広村（現和歌山県広川町）で営んでいた大きな醤油

仕事も無く途方に暮れ村を出て行く人もいた中で、ある決断をします。私財を投じて高さ五メートル、長さ六百メートルという遠大な堤防（広村堤防）を作ることとしたのです。この決断に関しては、濱口がいくら大店の当主と言えど独断ではできず、一族で団結をして取り組んだそうです。そして、四年の歳月を掛けて完成させ、仕事を失った村民の就労対策と津波の防災対策を同時に行い、村の問題を一挙に解決をしました。

この堤防は、完成から八十八年後の昭和二十一年に昭和南海地震での津波から広川町を守り、改めて濱口の偉業が見直されました。現在の広川町では、これら偉業を伝承するため、毎年堤防に住民が一握りの土を盛る「津浪祭」を行い、二〇二〇年には百十八回目を数えたそうです。因みに、濱口はこの後、日本の医学会にも多く貢献し、政治においても顕著な活躍をされたそうです。

### ●濱口梧陵から学ぶこと

地震・津波から多くの人を守つた的確な判断と勇敢な行動です。濱口は過去の経験から大地震で津波が来ることを予見して、村人に直ぐに避難を呼びかけました。こ

屋の七代目当主（現在のヤマサ醤油）であり、村を治める庄屋として、安政南海地震（M8.4）に遭遇します。丁度村の豊年祭の支



度に忙しくしていた村人たちは、潮が引き海底の岩肌が表れていることに気づいておらず、津波が直ぐにやってくることを予感した濱口は、高台の自分の田に積んであった稲むらに次々と火を放ちました。

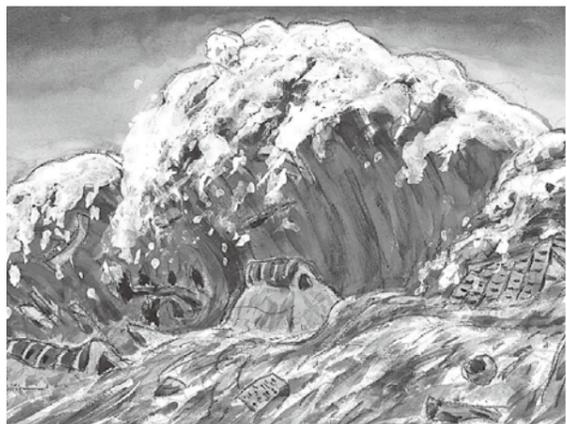
火に気づいた村人が消そうと次々に駆けつけた時、大きな津波がやってきて、村を飲み込んでしまい跡形もなくなってしまう

の共助の精神は今日でも非常に大切なものです。更に、堤防の構築に至っては、災害の教訓を次の災害に備えるという「行動」で示し、後世に残るものとなりました。これは庄屋としての公助であつたと思います。村のコミュニティを維持し、故郷を守つた偉人に改めて思いをいたしましょう。濱口梧陵のお話は、これでお終いです。

### ●日本海溝・千島海溝型巨大地震の影響について

今年三月二十六日、日本海溝・千島海溝型巨大地震を想定した、県内沿岸の津波浸水想定が公表されました。同地帯を震源とするマグニチュード7.5の地震の発生確率は、今後三十年以内に九十パーセント以上といわれ、今日起きてもおかしくありません。特に、太平洋側や陸奥湾内の市町村では、これまで予測されていた沿岸の津波高が大幅に高まったところが殆どでした。

一方、深浦町でもこの地震で起きる津波の影響を受けると発表されています。青森県の資料によれば、町内では、この地震発生九十七分後に第一波が一メートル八十八センチ、最大波が百四十三分後に二メートル六十七センチと、無視で



す。村人たちは、濱口が稲むらに

きない非常に危険な高さです。

### ●終わりに

念のため申し上げますが、日本海側を震源とする地震での津波浸水予測は、これまでと変わらず極めて高いので、揺れを感じたら「震源は？」などと考えずに、全ての地震で津波の可能性があると考え、先ず避難の意識が大切です。

### 参考文献

- ・内閣府「稲むらの火と津波対策」
- ・国際津波・沿岸防災技術啓発事業組織委員会著「絆 津波からのちを守るために」
- ・稲むらの火の館HP

### アプリで簡単！

防災放送の内容が確認できます！

下記QRからインストールしてください。詳しい設定方法は4月16日発行の「深浦町防災行政情報伝達システム」紹介パンフレットをご確認ください。



アンドロイド用



iPhone用